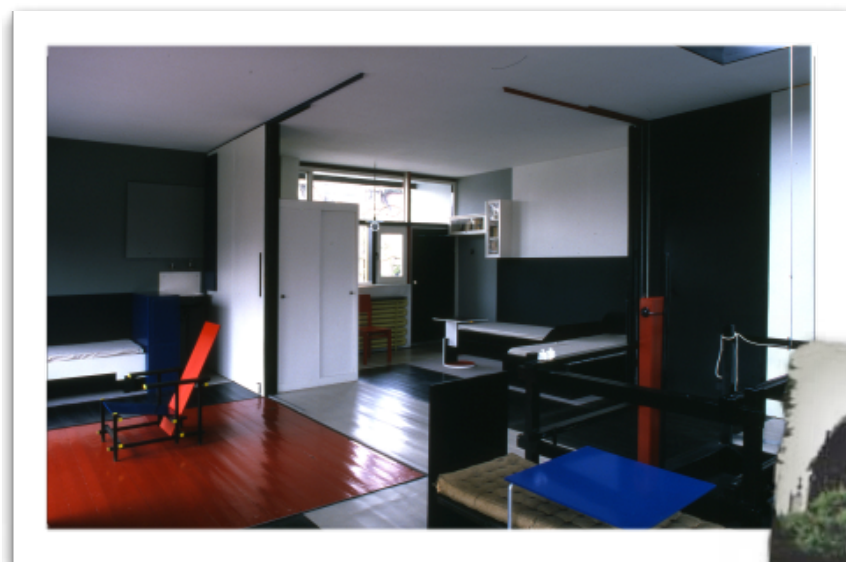


ヘーリット・トーマス・リトフェルトの

シュレッダー邸



オランダ・ユトレヒト 1924

建築としてはデ・スタイルの唯一の作品といわれているシュレッダー邸はユトレヒトの街外れにあります。オランダらしい煉瓦造りの、街並みが続いていくその端に、「えっ！」と思わず声を上げてしまうほどに小さくその「オブジェ」はありました。

正にデ・スタイルを反映した垂直と水平、そして赤、青、黄の三原色と黒、グレー、白だけを用いた建築。家の中の流れる空間は色々な間仕切りの工夫で変幻自在に開閉してしまう、それはもう面白くてたまらない忍者屋敷のようでした。このアイデアに満ちた室内は、リトフェルトのあの素晴らしい家具によって一体の絶好のバランスをもった空間に発展しています。この家は家具職人だったリトフェルトとインテリアデザイナーだったシュレッダー夫人の二人の思いがみえてくれる世界的にも最も面白く、心を沸き立たせる家でした。（写真左上：撮影/宮本和義）

オランダの近代建築は、父としてのペルラーヘが社会思想を反映した集合住宅の秀作を残していった後、彼の影響を強く受けながらも、感性を表現するのか、それとも、本質としての構成を基調にするかという、全く両極端に相反する二つのデザインに分かれました。前者がアムステルダム派、そして後者がロッテルダム派と呼ばれたデ・スタイル。両派共に1910年代～30

年代までのわずか20数年間に際立った活動をみせ、そして衰退しました。デ・スティルは画家ドゥースブルグとモンゴリアンの二人の活動で始まり、モンゴリアンが打ち出した新造形主義に曳かれて集まった芸術家、建築家によって組織されました。建築家の中にはリトフェルトそしてJJPアウトらがいて、デ・スティルを最もよく表現した作品例として、というよりは唯一の例としてシュレッダー邸が保存され、見学することができるのです。

リトフェルトのred&blue chair

感性を表現しようとするアムステルダム派と対立するデ・スティルは「本質」を追及しようとします。その本質を表現した作品はオブジェとなり、オブジェとは「対象」であって、見る人の印象が全ての表現となります。創作的な意味も目的もつことがなく、そこにあるのは形を生む「構成」だけであって、その構成こそ「本質」を反映したものでなければならない。

モンゴメリーはその本質を垂直と水平という線に、そして白、黒、グレーと、赤、青、黄の三原色を用いてデザインしていきました。デ・スティルの本質には、F.L. ライトに影響されて流れる空間があります。同じくらいライトに影響されたミースが流れる空間を追及しながら、その行き止まりの床と天井にはさまれた無限の空間をユニバーサル空間と表したように、デ・スティルもその流れる空間を表現していきます。家具職人リトフェルトはその巧みな技と更には優れたデザイン感覚によって変幻自在な間仕切り空間をつくっていきます。ミースはユニバーサル空間の中央にその用を集中させましたが、リトフェルトは彼の創る手作りの家具と間仕切りによる「開けたり閉めたり」によって、その用を成立させてしまうのです。

